報われぬ英雄イズレイル・ポッター

——メルヴィルの独立戦争神話——

中村紘一

(1)

メルヴィルの『イズレイル・ポッター——五十年にわたる彼の流浪——』*Israel Potter; His Fifty Years of Exile* (1854) の献辞はボストンの隣町チャールズタウンにあるバンカー・ヒル独立記念碑に寄せられたものであるが、その中に次のような文章がある。

この作品を殿下〔記念碑〕の足下に捧げるにあたり、私はいっそう心励まされるのである。そのわけは、文法上の人称を替えはしたものの、この作品はほとんど復刻版と言えるほどにイズレイル・ポッターの自叙伝を踏襲しているからである。彼が齢老いて衰弱した姿で母国に帰還した直後、彼の流浪（アドヴェンチュア）を綴った小さな物語が薄ぺらな灰色の紙でわびしく出版されて露天商の屋台に並べられた。これは恐らく自ら筆を執ったものでなく、口述筆記したものであろう。だが、「美しの門（うつく）」の傍で足萎人がつけた松葉杖の跡（訳注、「使徒行伝」第三章）に似て、このぼやけた記録も今では絶版となっている。本書は全くの偶然で屑拾いによって拾われ、ぼろぼろになった一冊に基いて書かれた。ある程度敷衍拡大したり、史実や個人的な詳細を付加したり、場面を一、二移し換えたりしたことを除いては、本書が崩れた古い墓石を修復したものといったふうに考えられても見当はずれではない。[1]

ジェイ・レイダの『メルヴィル日誌』によれば、メルヴィルは一八四九年初秋、右の献辞中にある「流浪を綴った小さな物語」を手に入れたらしく、その表紙が『日誌』には掲載されている。[2] これには『イズレイル・R・ポッターの生涯と驚くべき冒険』*Life and Remarkable Adventures of Israel R. Potter* という題が付けられ、一八二四年ロード・アイランド州プロヴィデンスで出版されたことになっている。また、その題の下には十行余りにわたるイズレイル・ポッターの略歴が付されていて、それによると彼が流浪の果て母国に戻ったのは七十九歳の時、つまり、国を出て、四十八年を経てからのことになっている。が、メルヴィルの作品の副題では「彼の五十年にわたる流浪」に、そして、メルヴィルの本文では彼が帰国した年は一八二六年、八十歳の時に、というふうに変えられている。

さらにまた、同じ略歴によれば、イズレイル・ポッターが帰国した月は「去る五月」であるにもかかわらず、メルヴィルの作品では「その船が港に着いて、ドックにつながれたのはたまたま七月四日のことであった」とされ、折しも、独立戦争当時愛国者たちが「自由の揺籠」と呼んだファナール会堂近くでは独立記念を祝う愛国的な山車の行列が行われていたと語られている。このファナール会堂の所在地はもちろんボストンであるが、イズレイル・ポッターが帰国した時の港は、実はニューヨークであった。

(2)

もっとも、この帰国した時の港名が判るのは、今度発刊されたノースウェスタン・ニューベリー版の『イズレイル・ポッター』（一九八二）に付録としてつけられた『イズレイル・R・ポッターの生涯と驚くべき冒険』の

おかげである。『メルヴィル日誌』では、前述のように、表紙からしかその内容を窺うことができなかったのが、ここでは百余頁に及ぶ全文がフォトコピーして掲載されているのである。メルヴィルが献辞の中で「今では絶版となって」いて、「全くの偶然で屑拾いによって拾われ、ぼろぼろになった一冊」と書いているものの全容が、始めて一般読者に明らかにされたわけである。

そこで、このフォトコピーされたものと、メルヴィルの作品とを読み較べてみると、メルヴィル自身は自分の作品は「ほとんど復刻版」と言い、「崩れた古い墓石を修復したもの」と述べてはいるものの、両者の差異は相当大きいことが判る。この差異については、同じノースウェスタン・ニューベリー版に付されたウォルター・E・ベザンソンによる「批評史注釈（ヒストリカル・ノート）」に極めて詳しいが、ここではとりあえずその中でも本稿に関連して特に重要と思われることがらを幾つか拾って考察してみたい。

(3)

メルヴィルが献辞の中で、一方では「イズレイル・ポッターの自叙伝」と述べ、またその一方では「自ら筆を執ったものではなく、口述筆記したもの」と微妙な言い方をしているように、このフォトコピーされたものは、厳密に言って、自叙伝ではない。というわけは、コネチカット州プロヴィデンスにヘンリー・トラムブル（Henry Trumbull, 1781-1842）という今では全く忘れられている印刷兼著述業の男がいて、この男が一八二三年たまたまその地を訪れたポッターと会い、独立戦争の時の兵士だったこの老人が年金をもらえず不遇の身をかこっているのを知って、その言い分をまとめて冊子に仕上げたものがこの書物であったからである。その際、トラムブルは、あ

たかもポッター自身が語っているかのごとく一人称の語りをとるという工夫をこらしたのである。なぜそうしたのか。

もともとイズレイル・ポッターという人物は歴史上有名な人物でもなんでもない。独立戦争に加わったといっても一介の兵士としてでしかなかい。だが、この全く無名の兵士がアメリカ建国という歴史にかかわったそのありさまは、一人称で語られる自伝という形をとることによってこそ始めて生々しい実在感を持って伝えられる、とトラムブルは考えたのに違いない。イズレイル・ポッターが無名であればあるほど、その存在には現実性が必要とされたのである。作者のトラムブルはここで、無名のイズレイル・ポッターとほとんど一体となって彼の代弁をつとめることによって、彼を独立戦争という歴史にしっかりと存在させた、と言うことができよう。

そうであるのに、メルヴィルは、先の献辞にもあるように、自らの作品では「文法上の人称を替え」て、イズレイル・ポッターを三人称で語る形をとってしまった。これにはどういう意味があったのだろうか。

ウォルター・E・ベザンソンは、このことは「単に『私は』と言うところを『彼は』に替えただけのように思われるが、そうではなくて、〔トラムブルの〕『生涯』に見られる単純な叙述のほかに、複雑な感受性を持つ語り手を創造したことは構成上極めて重要な行為だった[8]」と言う。これをメルヴィルの献辞中の言葉に沿って言い換えてみると、彼の作品は「ほとんど復刻版と言えるほどに……自叙伝を踏襲している」一方で、複雑な感受性を持つ語り手を創造する（ベザンソン）ことによって、「ある程度敷衍拡大したり、場面を一、二移し換えたり」したということになろう。

(4)

この「複雑な感受性」とは具体的にどういうことかについてはベザンソンは説明していない。そこで、本論ではそれを問題にすることになるが、メルヴィルが創造したこの語り手の機能は、早くも作品冒頭第一章から発揮されているのに注目したい。トラムブルでは「私は一七四四年八月一日、ロード・アイランド州クランストンの町で、信望の厚い両親のもとに生まれた」[4]とたった一行で極めて簡潔にその事実だけが書かれているイズレイル・ポッターの出生にまつわる記述は、メルヴィルの作品では四頁にもわたる「イズレイル誕生の地」という題の章に「敷衍拡大され」、しかも「場面を移し換えられている」のである。すなわち、誕生の地はメルヴィルが当時居住していたマサチュセッツ州バークシャー地方の丘陵地帯に移されてしまった。その理由は、語り手の言葉から推察すれば、まず、この地方の「類まれな風景の中に詩的瞑想（ポエティック・リフレクション）を行なうための豊かな糧を見い出せる」ためということになる。例えば、この地方にはさほど豊かでもない土壌を囲む石垣が多く見られることに触れて、ここでの初代の開拓者たちが報われることの少ない展望を持ちながらもこれらの石積みをやったのであると述べ、これを考えると「独立革命時代の人々の気質を知るための重要な示唆をわれわれに与えてくれる」とし、「献身的愛国者イズレイル・ポッターの誕生の地としてこれ以上に相応しい地方はありえないだろう」と、語り手は言っている。つまり、ここでの改変は、語り手の「人と風土」観を窺わせているのであって、すでにこの冒頭の語り口からでも、語り手は、自らの、どのようなイズレイル・ポッター像を作りあげようとしているかについては十分意識的であることが判るのである。

この章の最後の二つの段落でも、同じイズレイル・ポッターという独立戦争の一兵士を扱っていながら、トラムブルの態度とは劃然たる相違が見られる語り口となっている。まず最初の段落はこう語られている。

彼は良き清教徒であった両親によって予言めいたイズレイルという名を付けられたのだが、それというのも、四十年以上にわたって哀れなポッターはこの世の極端な労苦と悪、という荒野をさすらうことになったからである。[5]

言うまでもなく、実在の人物ポッターはその洗礼名をたまたまイズレイルと言ったにすぎない。しかし、ここで、語り手はポッターのその後の生き方を見て、それと亡国・流浪の民イスラエル人を連想せずにはおかない。語り手は主人公の名すらに早くも寓意・象徴性を見ようとしていると言えよう。

さらに次の段落についてはどうだろうか。

子供の頃、ニューイングランドの丘陵で父のはぐれ牛を追いかけた時、自らが逃亡反逆者としてオールドイングランドでの半分を獣のごとく追い廻されるなどと彼〔ポッター〕が考えたことがあろうか。また、これらの山々の秋の霧に包まれた時、海を三千マイルも超えたロンドンの石炭の霧の中を絶望してさ迷うというもっとひどい当惑が自分を待ち受けているとどうして彼が夢想しえただろうか。だが、そうなることが彼の運命だった。この丘陵の少年は、輝くフーサトニック川を前にして生まれていながら、生涯の大半を捕虜あるいは乞食としてテムズ川の汚れた川岸で流浪して過ごすことになっていたのである。[6]

第一章末に置かれたこの段落を読んでみてすぐ気がつくことは、語り手が主人公の誕生（の地）を語ると同時に、早くもその後の運命までも語ってしまっていることであろう。こういう語りができるのは、イズレイル・ポッターの全生涯を知って始めて可能なのであるが、その点では、一人称で語られるトラムブルの作品の語り手の

場合でも同じであろう。にもかかわらず、トラムブルはそれをおくびにも出さず、逆にメルヴィルの語り手は思わせぶりたっぷり、物語最初から早くもその結末までをさらけ出しているのである。これは、要するに、トラムブルの場合には、前にも述べたように、一人称で語られる内容の信憑性ということが第一に念頭に置かれていて、主人公でもある語り手が刻一刻自分の未知の出来事を語るという体裁の方が、読者にはより本当らしく聞こえるためであろう。それに反して、メルヴィルの作品の場合には、語り手とその語る内容との間には大きな距離・余裕があって、そのぶん語り手は語る内容の信憑性を必ずしも第一義のものにしていない、と言えよう。そうすると、一体語り手の狙いは何であったのかという疑問が生じることになる。

それを考える前に、右に引用した第一章最後の段落を読んでもう一つ気づくのは、次のような興味ある言い廻しが行われていることである。すなわち、「ニューイングランド」と「オールドイングランド」、「追いかけ(る)」と「追い廻される」、「これらの山々の秋の霧」と「ロンドンの石炭の霧」、「輝くフーサトニック川」と「テムズ川の汚れた川岸」といった言葉の対比・対照的な言い廻しである。これは、もちろん語り手によって意識的に行われた言葉の遊び、ないしは飾りである。つまり、語り手は単にイズレイル・ポッターの生涯の事実を述べるのではなく、その事実に言葉の飾りつけを行おうとしていると言うことができるのである。

(5)

このようにして、すでに第一章で語り手はバークシャー地方の風景に対する詩的瞑想、イズレイル・ポッターという名前に対する象徴的解釈、そして、事実を記述するにあたっての言葉の装飾といったことを行っているの

であるが、それに加えて、イズレイルの若き日々の冒険を語る時の次のような語り口にも注目したい。

> イズレイルは鉄砲と弾薬を買うと猟師になった。鹿、ビーバーなどはたくさんいた。二、三カ月で、多くの立派な毛皮を獲た。私〔語り手〕が思うに、このようにして自分は人間を狙う狙撃兵となるために修行しているのだという考えは彼の心には決して浮かばなかったであろう。しかし、バンカー・ヒルで実証されたあの見事な射撃はこのようにして訓練されたのである。[7]

ここは、ウォルター・E・ベザンソンが指摘するように、全篇中、語り手が「私」として直接顔を出す唯一の箇所であるが、その語り手の「私」は、イズレイルが猟師となったのは将来狙撃兵となるためであるなどとは主人公の「心には決して浮かばなかったであろう」と一応否定しているものの、実はそうであったのだと言っているのである。同工の語り口が、イズレイルが捕鯨に出かけた事を語る時にも行われる。

> そこ〔南海〕で、昇進して銛打ちになったイズレイルは、すでに荒野において鉄砲を使うことでその眼と腕を上達させていたのであるが、今や鯨を撃つ銛を投げることで命中させる能力をいっそう強化させたのである。[8] 相変らず無意識のうちではあるが、バンカー・ヒルでライフル銃を握る時の準備をしていたことになる。

こうなると、主人公の若き日の冒険はことごとくバンカー・ヒルの戦いのための修行であったということになって、語り手はそれまでの主人公の行為のすべてにこじつけとも言える動機づけをしていることが判る。言い換えれば、もともとバンカー・ヒルの戦いに加わったのも偶然のことでしかなかったようなイズレイル・ポッターのかなり出鱈目な人生は、語り手のこの強引な動機づけによって、独立戦争を戦うための人生だったというように整理され有目的化されることになる。つまり、イズレイル・ポッターの生涯という事実は語り手によって、虚

構化・神話化されていると言えよう。

もちろん、このことはトラムブルによる『生涯』においても大なり小なり行われているはずである。そういうことなしには、一般に人の生涯を振り返って筆を執るということなどは不可能であろう。しかし、前に述べたように、トラムブルの伝記では一人称で書かれているがゆえに、主人公の（人生の）実在感に大きな重点が置かれていたと考えられるのに対し、メルヴィルの作品では、語り手はその実在感を基にして、（あるいは、時には無視して、）主人公の人生は独立戦争のための人生であったことを強調するのである。かくして、「生涯の大半を捕虜あるいは乞食としてテムズ川の川岸を流浪して過ごし」た無名のイズレイル・ポッターは独立戦争の英雄として神話化されることになったと言えよう。

ウォルター・E・ベザンソンは、「メルヴィルは自分自身の書いた物語の真中の部分（ミドル・セクション）でイズレイルを部分的に神話的人物に仕立てるよう敷衍拡大した」[9]としているが、すでに見てきたように、それは早くも物語冒頭から、しかも全面的に行われていることが判るのである。

(6)

語り手は、次の四章でいよいよ、独立軍志願、バンカー・ヒルでの戦い、負傷、捕虜、イギリス本国への連行、脱走、ロンドンで独立支援グループとの接触、そして、当時パリ在の建国の父ベンジャミン・フランクリンへの密使といったイズレイル・ポッターの波瀾万丈の事件を語る。これらの四章は、メルヴィル作品中もっとも忠実にトラムブルの伝記に沿って語られている部分であるが、その理由は、察するに、語り手にとって、主人公が現

実に経験したこれらの事件そのものが虚構の手を加えるまでもなく冒険的で英雄神話の創造という自分の意図に十分相応しいものと判断したからではなかろうか。

(7)

ところが、イズレイル・ポッターが歴史上の人物フランクリンにパリで会うところを語る語り手の語り口には、再び「敷衍拡大」の現象が見られることになる。（先に紹介したウォルター・E・ベザンソンが言う「物語の真中の部分」とはこの章のことを指している。）【具体的には、トラムブルの伝記ではたった一節の記述がメルヴィルの作品では三章にも膨らまされる。トラムブルのその一節も直接フランクリンに言及されるのは段落半ばからにすぎない。

フランクリン博士との会見は楽しいものであった。――一時間近く私と話を交されたが、このうえなく気持がよくしかも啓発的な態度であり、私の苦労話にもはっきりと大きな興味を持って耳を傾けられ、私を激励されたい様子で、アメリカ人民はもしその壮大な目的に成功し独立を確立したならば、戦争を務めた兵士たちにきっと報いるであろうと約束された。――だが、ああ、悲しいかな、私に関しては、その約束はいまだに実現されていない！――しかしながら、もしあの偉大な善き人が（その人間性と寛大さは私よりもはるかに有能な人の筆の対象（テーマ）であったのだが）今日まで生きておられたならば、私は私の国に対して空しい請願をして年金のつかの間の享受を得ようとすることもなかったと確信するのである。[10]

さて、ここでトラムブルが描くフランクリン像とは、「気持がよくしかも啓発的な態度」、「偉大な善き人」、その豊かな「人間性」と「寛大」な心は筆舌に尽し難いこと、そして、もし彼が今存命ならば自分の苦境はあり

えなかったほどの人、といったふうにほとんど最上級の褒め言葉からなるものである。加えて、フランクリンは「私よりもはるかに有能な人の筆の対象」になるような人物というふうに述べられると、語り直しを行うメルヴィル作品の語り手としては、それを一つの挑発として受け止めたとしても不思議でない。語り手は、トラムブルの記述をここぞとばかり「敷衍拡大」するが、それは、言ってみれば反発行為のようなもので、およそトラムブルの描くフランクリン像に沿ってではなかった。

例えば、トラムブルの主人公がフランクリンが生きていさえすれば独立戦争で苦労した自分はきっと報われていたに違いないとの趣旨を述べていることに関連して、メルヴィル作品で描かれる次のような場面はどうであろうか。

イズレイルは直ちに話を始めて、今までの自分の経験をすべて〔フランクリン〕博士に語った。
「きっと」と、博士はイズレイルの話が終るのを待って言った。「君は海を越えて友だちのいる所へ帰りたいのだろう?」
「その通りです、博士」
「まあ、君を帰国させてやることはできると思うが」
イズレイルの眼は喜びで輝いた。穏やかな哲人はそれに気づいて言った。「しかし、このごろのことの成り行きは不確なことばかりだからな。嬉しい見通しには決して得意になるなかれ。だが、不吉な兆には意気消沈することなく心せよ、だよ。人生はそれほどに多くのことを私に教えてくれたからね、君」
イズレイルには、まるで干しぶどう入りのプディングが鼻先に突きつけられたと思ったらすぐに急いで引っ込められたかのように感じられた。[13]

この場面でのメルヴィルの語り手は、二人の人物の会話を見事に創作していることもさることながら、そうすることによって、トラムブルが描くフランクリン像に疑問を投げかけている。それと言うのも、トラムブルの文

章では主人公がフランクリンの寛大さ・善意を最後まで信じて疑わないと想像されるのに反し、メルヴィルの語り手はそれを鼻先に突きつけられた「干しぶどう」のようなものとからかっているのである。つまり、偉大なフランクリン像は、メルヴィルの語り手によって、それだけ卑小化されている、と言えよう。

(8)

ところで、右のフランクリンがイズレイル・ポッターに言って聞かせる言葉の中に、「嬉しい見通しには、決して得意になるなかれ。だが、不吉な兆には、意気消沈することなく、心せよ」という文句がある。この文句が格言仕立てであることは瞭然であろう。メルヴィルの語り手によって「拡大解釈」されたフランクリン像では、このような格言（めいたもの）が次から次へと口を衝いて出る。例えば、「助けられた人が感謝しすぎると助けた人の心をうぬぼれさせ傲慢にする」「大義のない勇気は愚の骨頂」「貧乏人が自分の金で外食するのは損な策」「質素な水は質素な人のための良き飲物」（逆に「貧乏人は高くつく贅沢ゆえにワインを飲むな。金持ちは、命取りの道楽になるゆえにワインを避けよ」）「寛大であろうとすることは物を失わねばならぬこと」等々。

言うまでもなく、実在のフランクリンは、『貧しいリチャードの暦』*Poor Richard Almanack* (1733-58) と『富に至る道』*The Way to Wealth* (1758) の著者である。彼の格言集とでも言うべきこれらの作品は当時のベストセラーであり、また、たとえその書名は忘れられることはあったにしてもフランクリンという名と彼の格言自体は十九世紀を通して今日に至るまで人口に膾炙してきた。だから、ここでは、メルヴィルの語り手は、想像を逞しくして、フランクリンに相次いで格言めいたものを口にさせているわけで、その点に限っても、その語

り口は実在のフランクリンに迫ろうとする巧みな「拡大解釈」であると言えよう。

しかし、メルヴィルの語り手がここでフランクリンに数々の格言を語らせているのは、単に実在のフランクリンが多くの格言を残したからというだけでなく、そもそも格言というものの本質とそれを口にする人間の性質をそれとなく問題にしているのではないか、とも思われるのである。

一般に格言というものは何がしかの真実を伝える。それは世智に基づく真実であると言えよう。世智とは世渡りの知恵であって、それは、人間はもし欲しいがままに生きれば必ずや挫折を招くであろうから、自らを抑制しなければならないと説く。だから、節約、勤勉、節制などといった徳が説かれる。つまり、格言とは人間の自由や解放や快楽を制限し戒めるための言葉であると言えよう。そして、戒めの言葉であるから、それはいかに気のきいた言い廻しがされようとも本質的に冷たい響きを持つことになる。それを好んで口にする人間の人柄についても、うわべはともかく根本的には冷たいものではないかと想像される。とすると、トラムブルの主人公が信じたフランクリンの寛大さ（＝暖かさ）は、このようにしてメルヴィルの語り手によって、巧妙に否定されることになろう。その極め付きは、メルヴィル作品で主人公が「貧しいリチャード」の言う「神は自らから助くる者を助く」の格言を読むことになることで、それは「フランクリンがもし生きていたならば」というトラムブルの主人公の期待に対するあざやかな回答になっているのである。

(9)

このように、格言を口にさせることによってその人物像を彷彿させる方法は、言わば巧妙かつ密かに行われて

いることであるが、メルヴィルの語り手は、他方では、自らの抱くフランクリン像についてかなり率直に語ってもいるのである。語り手は、フランクリンのような多才な人物は「このような単純な物語」ではほとんど描けるものではないと述べたうえで、自分が描こうとするフランクリン像を次のようにはっきりと言ってのける。

このイズレイルとの私的な偶然の出会いは彼〔フランクリン〕の正体がはるかに劣った性質——けちん坊で、世帯じみて、野菜しか食べず、おそらく滑稽な道学者であることを示すのに役立ったにすぎない。この賢人には多くの善意の皮肉と無邪気な悪ふざけが見られた。語り手は、ここで彼のあまり褒められぬ習性を描こうとして、かつては彼の額にいかめしく乗っていた尊い帽子をうやうやしく扱うよりも、哲人が穿いているウーステッド製の長靴下を弄んでいるかのごとくに感じているのである。[13]

要するに、語り手の意図は歴史上の英雄というフランクリン像を矮小化することにあった、と言えよう。晩年のフランクリンはパリにあって社交界の花形であった。が、そのことについても、語り手にかかると必ずケチが付く。

彼〔フランクリン〕はパリきっての知識人階級の賞讃を博していたのみならず、七十二歳の年齢でフランス宮廷最高の才媛佳人たちの寵愛を受けていた。彼女たちはもともとは盲目的な流行のせいで、有名な学者(サヴァン)として彼に魅かれたのだが、彼のプラトン的な優雅なユーモアに対する終生変らぬ賞讃者となっていた。[14]

おおむね賞讃の言葉を並べながら、一言「盲目的な流行のせいで」と付け加えるここでの語り口には、フランクリン人気も所詮は自らの鑑識眼を持たない付和雷同的なパリ社交界の産物にすぎないというからかいがある、と考えてよい。

同様にして、フランクリンをフランクリンたらしめてきた彼の多彩な才能についても、語り手は一応世評に沿って賞讃しているかに見えて、実はちくちくと皮肉な言辞を吐かないではおかない。

フランクリンは世間を注意深く量り、その中でどんな役割も演じることができた。生まれつき知識に向けられていた彼の精神はしばしば厳粛に見えたが、決して真剣になることはなかった。時には、真剣さ――他人に対して極端に真剣になることはあったが、自己に対して真剣になることは決してなかった。それに代って平静であることが彼の特徴だった。言わば、この平静さを具えた哲学的軽俳浮薄が彼の手軽でさまざまな仕事に現われている。印刷屋、郵便局長、暦屋、随筆家、化学者、雄弁家、鋳掛屋、政治家、ユーモリスト、哲学者、社交界の男、経済学者、家政学教授、大使、事業家、格言屋、薬草医、智恵者――何でも屋で、どれも征服（マスター）しているが誰かに征服（マスター）されることはない――彼の国の典型で天才である。フランクリンは何でもできたが、ただ一つ詩人にはなれなかった。[14]

ここで、フランクリンが「世間を注意深く量」るというのは、彼は計算深くおのれの功利に目敏いということを、語り手は言っているのだと解釈することもできよう。また、語り手によれば、彼の精神は外から見る限りにおいては「厳粛（グレイヴ）」であっても内面は「真剣（シリアス）」さに欠け、その代償として、心の「平静さ（トランキリティ）」を保ってはいるが、それは彼が「真剣」さを欠いていることの裏返しにすぎないことになる。要するに、彼の精神には重さがないのである。「軽俳浮薄（レヴィティ）」なのである。だからこそ「手軽に（イージー）」さまざまな分野で活躍することができたわけであるが、ただ「詩人」にだけはなれなかった。考えてみれば、これは全く当然のことで、およそ世俗の功利にとらわれた軽俳浮薄な魂ほど詩人とは無縁なものはない、というのがここで語り手の言いたいことなのであろう。

フランクリンが独立革命（戦争）の偉大な功労者であり英雄であったのは周知のことである。のみならず、あるいはそれゆえに、彼の他の分野における功績もつとに評価され、一般大衆にも知れ渡っていた。要するに、彼

は独立戦争当時にあってすでに英雄であり、偉人であり、十九世紀のメルヴィルの時代においても（そして、現在でも）その事情には変りない。だから、トラムブルの作品に出てくるフランクリン像などはそれが高じてややもすると実像を無視しているのではないかと思われるほどに偉人としての神話的存在になってしまったとしても不思議でない。もちろん、一般大衆のフランクリンに対する理解もそのようであったとしても無理からぬことであった。しかし、メルヴィルの語り手は、そこに反感を覚えたようである。すなわち、語り手は、ちょうどイズレイル・ポッターという独立戦争の無名戦士を英雄として神話化しようとしたのとは全く逆に、独立戦争から続くフランクリンの偉人神話像を壊しにかかった、と言えば言いすぎなら、少なくとも疑問視したのである。メルヴィルの語り手は、その方向に向かって、トラムブルのフランクリン賞讃の短い文章を「拡大解釈」して語り直しているのである。

(10)

同じように、トラムブルの伝記の中で言及され、メルヴィルの語り手によって「拡大解釈」された独立戦争中の実在の英雄にポール・ジョーンズ（Paul Jones, 1747-92）艦長がいる。もっとも、トラムブルの伝記の中では、フランクリンの場合と違ってポール・ジョーンズに主人公が直接会って話をしたというような体験は書かれていない。むしろ、独立戦争の英雄中の一人ということで、事のついでに言及したという感じが強い。

アメリカの大義のために参戦した者の中、あの豪胆な冒険家ポール・ジョーンズ艦長ほど英国におけるアメリカの名声を確立し、高慢な英国人にヤンキーの勇敢で不屈の決断を納得させるために尽力のあった人はない。彼のために、英国の西岸

は十月余りの間震撼としていたのである。――彼は大胆にもホワイトヘイヴンに上陸し港の船を焼き、また、町を焼き払おうとさえしたのであった。[15]

メルヴィルの語り手は、トラムブルのたったこれだけの短い英雄礼讃の文章を彼の活躍ぶりから性格描写に至るまで数章にわたってやはり「拡大解釈」して語り直しているのである。そして、この「拡大解釈」にあたっては、メルヴィルは例によって、ポール・ジョーンズに関する幾つかの資料を渉猟しているが、しかし、主人公がこのポール・ジョーンズとさまざまな形で行動をともにするという筋立てはメルヴィルの語り手の独創である。語り手は、こうすることによって、どうかするとやや退屈なトラムブルの伝記を離れ、主人公の冒険をいっそう波瀾に富んだものにし、物語を面白くもしていることに加えて、やはりここでも一種の偶像破壊、ないしは、そのきっかけを提供しているのである。例えば、語り手は次のような語り口をする。

ポール・ジョーンズが悪党であったか、英雄であったか、それともその両方を兼ね備えていたかについては、多くの微妙な決疑論が展開されてきている。が、戦争と戦士の問題は政治と政治家、宗教と宗教家の問題と同様、形而上学を容れないのである。[16]

ここでは、彼が英雄であったかどうかについてはいちおう判断停止の形をとってはいるものの、これが従来の大方の素朴なポール・ジョーンズ英雄論でないことには間違いない。

メルヴィルの作品には、もう一人、実在の英雄であったイーサン・アレン（Ethan Allen, 1738-89）が登場する。この英雄の名はトラムブルの伝記には言及すらされていない。ということは、一つの判断の基準として、フランクリン、ポール・ジョーンズ、イーサン・アレンの順で独立戦争の偉人英雄の知名度は低くなっている、と考え

ることもできよう。ところが、面白いことには、メルヴィルの語り手は、その順で彼らに対する評価の厳しさを緩めているように思われる。すなわち、語り手の批判はフランクリンにはもっとも厳しく、イーサン・アレンにはもっとも甘い。いや、イーサン・アレンについては、語り手はほとんど弁護と言ってよいくらいの語り方をしている。

アレンは、ヘラクレス、ジョー・ミラー（訳注、一六八四―一七三八、英国の喜劇俳優）、バヤール（訳注、一四七三?―一五二四、中世騎士の鑑とうたわれたフランスの騎士）、トム・ハイアー（訳注、ボクシングの選手権保持者）のような人々を奇妙な形で組み合せた人物に思われた。ベルギーの巨人のような身体つきで、内なるところにはスイス人のごとく山の調べを秘め、獅子心王のような勇猛果敢な心をしていた。ニューイングランドの生まれだったが、その特徴を全く見せなかった。率直で、飾り気がなく、異教徒のように人付きあいがよく、ローマ人のように陽気で、取り入れ時のように元気横溢していた。そこに彼特有のアメリカ人魂がある。というのも、西部魂こそ真のアメリカ人魂であり、将来もそうなのである。（他にはないし、また、ありえない。）[17]

語り手は、ここで、イーサン・アレンが豪傑であることを述べ、それは西部魂（ウエスタン・スピリット）、ひいてはアメリカ人魂（スピリット）につながることを指摘して、彼の弁護ないしは讃美を行っているように思われるのであるが、その理由は、一つには、イーサン・アレンがイギリス軍の捕虜として不名誉な処遇を受けたために語り手はその償いをしているのである、と考えることができよう。語り手は、彼の乱暴な性癖についてさえも、次のような弁護の口調をとる。

彼〔イーサン・アレン〕の受けたような処遇が彼のような人間に生じさせたに違いない自己主張への腹立ちまぎれの性向に加えて、威張りちらす看守に対しては、柔順で大人しくしているよりも、陽気で無謀で高慢でさえあるような野蛮人の役を演じる方が、自らを支えることができるであろうということを彼は経験から学んでいたに違いない。[18]

(11)

さて、すでに触れたように、トラムブルの『生涯』では、フランクリンの場合を除き、イズレイル・ポッターがこれら実在の英雄たちと直接交渉を持ち行動を共にしたようなことは全く述べられていない。したがって、例えば、イズレイル・ポッターがジョン・ポール艦長とともにレインジャー号に乗り組み、敵艦ドレイク号を降参させる活躍をしたという冒険などは全くメルヴィルの語り手の創作である。語り手は、こういった戦闘場面をトラムブルの伝記以外の資料を頼りにして創作し、その中にイズレイル・ポッターを登場させ、その活躍ぶりを生き生きと（そして、多分に嬉々として）描いている。つまり、イズレイル・ポッターに英雄と呼ぶに十分値するような活躍をさせている。ポール・ジョーンズと較べても遜色ない人物に仕立てあげている。

しかしながら、その語り手は、そのような虚構に全く夢中になっているかに見えて、あるいは、夢中になればなるほど、最後には次のような言葉を吐かずにおれないのである。

この航海はポールの名声を派手なものにした。特にフランス宮廷においてはそうであって、国王はポールに剣と勲章を与えた。ところが、哀れなイズレイルは、彼もまた全く誰の助けも借りず一隻の船を征服したのに――いったい何を得たのか？[18]

右の文章から推察して言えることは、語り手の心の中には、現実のイズレイル・ポッターが報われることのない無名戦士であったからこそそれだけに虚構の中で英雄的行為をさせて、言わば歴史の埋め合せをしたい気持が

あったのではなかろうか、ということである。

それゆえにであろうか、語り手はイズレイル・ポッターを史上有名なリチャード号とセラピス号の海戦にも参加させる。この海戦についてもトラムブルの伝記には言及がなく、語り手は別の資料に拠っているのであるが、その戦闘場面の描写（十九、二十章）には大変な力の入れようが窺える。ところが、その高揚した戦闘場面の直後に、またもや、それに水をさすような一言を付け加える。

この戦闘にかんがみて、人は当然疑問を抱くであろう。――文明人と野蛮人を分つものは何か？　文明とは野蛮と全く別個のものなのか、それともその進歩した段階なのか？[20]

ここで、語り手はせっかく主人公を有名な海戦で活躍させながら、ふと我にかえって、その海戦自体、ひいては独立という大義を持つ戦争にも疑問を抱いているように思われてくるのである。

(12)

そして、そのことは、語り手が物語最後になって再びトラムブルの伝記に戻ることによって、今までやっとのことで英雄的人物に仕立てあげてきた主人公を、戦後の不遇に陥らせなければならなかったことと決して矛盾するものではない。すでに見てきたように、メルヴィルの主人公はフランクリンとの接触以後はトラムブルの伝記を自由に離れて華々しい英雄的活躍をしてきた。したがって、語り手は、主人公がそのまま歴史上の英雄たちと同じく栄光の生涯を終えるという形で結末をつけることもできたはずである。むしろ、それまでの語り手の主人

公の扱い方から考えるとその方が自然のようにも思われる。にもかかわらず、語り手はトラムブルに戻る。つまり、主人公を不遇の身に置かずにはおれないのである。

その理由は、再び繰り返せば、語り手の意図があくまでも無名戦士の英雄、つまり、報われぬ英雄という言ってみれば矛盾撞着的な神話の確立にあったからではないか、と考えられる。ありきたりの英雄神話では、英雄は当然のことながら有名であり、報われているはずである。それゆえ、さらに考えてみれば、この報われぬ英雄という神話こそは、たとい語り手があらわに口にするようなことがなくとも、戦争の空しさ、それが独立ための戦争という大義を持つにせよ、やはりその空しさを訴えてやまないような気がするのである。

もっとも、メルヴィルの語り手がトラムブルに戻ったと言っても、相変らず独自の語り口を見せていることに注目してよい。それは、二十三章「エジプトのイズレイル」、二十四章「冥府（ディース）の都市にて」といった章題の付け方に端的に表わされている。前者はロンドン郊外で困窮のために煉瓦工として奴隷のように働かねばならなくなったイズレイルの身を「出エジプト記」のイスラエル人に喩えているのであり、後者はその後四十年間も主人公が数々の辛苦をなめることになった都市ロンドンのことを指している。一方は旧約、もう一方はローマ神話における比喩ではあるが、ここでもまた、語り手は、主人公の不遇の身すらをもどうかすると神話的語り口をしてやまないことに気づくのである。

冒頭で触れたように、メルヴィルの語り手は主人公の五十年ぶりのアメリカ帰国の日を「七月四日」にするというふうに虚構化してしまっている。また、この作品がもともと『パトナム』誌に連載形式で発表され始めた当初には「七月四日物語（フォース・オヴ・ジュライ・ストリー）」という副題が付けられていたという。つまり、この作品は、語り手（＝メルヴィル）にとっての「独立戦争記念物語」であったと言えよう。そして、その物語とは、ある一人の無名戦士の生涯を語

り直すことによって、「報われぬ英雄」神話を創造することに他ならなかったのではないか。報われてこそ英雄であるならば、報われぬ英雄というのは矛盾である。しかし、その矛盾は、たとい独立のためという大義を持つ戦争であっても戦争というものが一般に意味するところのものについて語り手がどのように感じていたかをたくまずして語っているように思われてくるのである。

注

① Herman Melville, *Israel Potter, His Fifty Years of Exile* (The Northwestern-Newberry Edition, 1982), vii.
② Jay Leyda, *The Melville Log* (Gordian Press, 1969), p. 315.
③ Herman Melville, *Op. Cit*, p. 187.
④ *Ibid*., p. 291.
⑤⑥ *Ibid*., p. 6.
⑦ *Ibid*., p. 9.
⑧ *Ibid*., p. 10.
⑨ *Ibid*., p. 186.
⑩ *Ibid*., pp. 336-7.
⑪ *Ibid*., p. 42.
⑫⑬⑭ *Ibid*., p. 48.
⑮ *Ibid*., pp. 345-6.
⑯ *Ibid*., pp. 95-6.
⑰ *Ibid*., p. 149.
⑱ *Ibid*., p. 150.
⑲ *Ibid*., p. 113.
⑳ *Ibid*., p. 130.